白門経友会

新年を迎え、学生たちは学年末に向け頑張っています

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年は新型コロナが五類の感染症に引き下げられ、ようやく日常がもどってきて街も賑わうようになってましたが、ウクライナ紛争（戦争）に加えてパレスチナでも紛争（戦争）が起こるなど、世界情勢は混沌の度合いを増しています。また、原油や食品の値上げ、コロナ後の世界的な需要の拡大と急激な円安など複合的な要因によって生じた急激な物価高が私たちの生活を直撃するなど、心配なことが数多く起こりました。今年こそは、皆様方が心穏やかに過ごせる一年となることと願っておりましたが、年明け早々「令和六年能登半島地震」が起こりました。被害に遭われた方々に対して、この場を借りてお見舞い申し上げます。

さて、多摩キャンパスのほうは落ち着いた雰囲気を保っています。コロナ禍にさまざまな制約の下で学生生活を送っていた学生たちは、のびのびとキャンパスライフにいそしんでいるようです。今は学期末を控え、学期末試験に向けて頑張っています。本号では、法学部移転後の現在の多摩キャンパスを、学生によるレポートやキャンパスの風景の写真を中心にお伝えします。

多摩キャンパスの今

今年度の経済学部の授業は原則対面で行われ、キャンパスではまだマスクをしている人が少なくありませんが、コロナ以前の状況にほぼもどっています。もっとも、コロナ禍を経て、さまざまな分野でオンライン化が進み、会議もオンラインで済ますことが多くなりましたし、レポートもオンラインでの提出が普通になり、休講の補講も、そのために補講の時間を新たに設定するのではなく、オンラインで授業を提供するという選択肢もあります。

このような変化に加え、本年度から法学部が茗荷谷キャンパスに移転し、五〇〇〇名以上の学生が多摩キャンパスからいなくなりましたので、コロナ禍以前のキャンパスの状況とはずいぶん変わりました。かつての平日のペデ下は都心のような雑踏状態のときもありましたが、今はそうでもなく、落ち着いた雰囲気になっています。モノレールの駅も、明星大学の学生も利用しますので、時間帯によっては大変な混み具合でしたが、緩和されたように感じます。

もっとも、学生の捉え方は、長くこの大学で過ごしてきた教員の抱く感慨とはずいぶん違うようです。次に二名の現役学生に、最近の多摩キャンパスの様子をレポートしてもらいましょう。

中央大学経済学部における ポスト「新しい生活様式」

白井　嵩海（四年生）

初めまして、経済学科四年の白井嵩海と申します。私は新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の影響で初の緊急事態宣言が発出された二〇二〇年四月に入学し、来年の三月で卒業を迎える、コロナ以前の大学を知らない初の学年となります。

さて、中央大学にとって今年度最も大きなイベントは法学部の茗荷谷移転です。実に四五年ぶりとなる法学部の都心回帰で六号館はすっかり人の影が無くなりました。ですが、キャンパス全体で学生が減ったかと言えば、私はそのようには感じません。というのも、去年まではオンライン形式の授業がそれなりに開講されており学内がコロナ前のように混雑していた訳ではなかったからです。今年はオンライン形式の授業はほとんど開講されておらず、ほとんどが対面ですから、結果として、法学部が移転したことにより学内にいる学生の数はほとんど変わらないように思えます。

以上は量の視点で学内の様子をお伝えしたものですが、質の視点ではある変化に気づきます。最近の大学生は勉強しないとしばしば言われることがあるようですが、ＯＢ／ＯＧの皆様はどのように思われるでしょうか。現役学生の立場では当然反論したいのですが、私としては、今と昔を比較しようがありません。

四年前、私たちは新型コロナウイルス感染症の流行でオンライン形式での授業を余儀なくされ、その影響で授業の姿も試験の姿も大きく変化しました。オンライン形式での試験は対面で監督することができないために、従来の試験をそのままオンライン形式で実施するだけでは授業内容の習得状況を確認できず、平等や公平性の観点からも問題があります。そのためレポート形式での試験や、資料の参照を前提とした平年より難化した試験での実施が多く、その分勉強量も求められました。現在では多くの科目がオンライン形式から対面形式での授業及び試験へと回帰しました。一部の科目は元の形式に戻したようですが、新しい形式での試験を継続する科目も多くあると聞きます。それもあってか勉強熱心な学生は多いように感じます。

一回生の時期に取り組む基礎的な経済学を上記の理由で熱心に勉強することは経済学の応用科目を勉強する際に非常に役立ちますし、経済学そのものへの興味関心を更に引き立てます。これがゼミ活動などの活性化に寄与したことは言うまでもありません。

この傾向がどうなるかは、将来後輩が寄稿するであろうキャンパス・レポートに委ねたいと思います。

7 号館 2 階に新設された、オンライン授業等のための遮音ブース

法学部は移転したけれど…

増井　佳秀（三年生）

大所帯、法学部の移転。五千人強の学生が茗荷谷へと学びの場を変え、多摩は静けさに包まれた。人々の交流は次第に減っていき…。

と、そのような書き出しにしようかと思いきや、意外にも学内の賑わいが絶えることは無かった。確かに、以前に比べれば人通りは少なくなった。ヒルトップやモノレール駅、生協等にて、多少は人との間の空白が増えた気もする。しかし、依然として学内の賑わいが絶えることはない。それもそのはず、多摩キャンパスにはいまだ約一万四千人もの学生が残っていると聞く。法学部生五千人強を差し引いた上で、である。多摩の広大なキャンパスをもってしても、この数字を前に静寂を演出するには至らないだろう。

法学部が移転したものの、混雑具合に大きな変化はない。

法学部があった六号館こそ、最初はどうなるものかと思われたが、現在は多くの学生が勉学や会議の場として活用している。法学部の移転に関しての私や周囲の率直な感想は、「意外にも大きな変化は無い」、というものであった。もっとも、法学部生や、法学部との関わりを持つ者にとってはこの限りではないだろう。卒業とは別に大人数の移動があったのだ。そこに多くの出会いや別れが存在したことは、想像に難くない。

国際経営・国際情報学部の創設に始まり、コロナ禍による対面授業の自粛、法学部のキャンパス移転。歴史の長い中央大学においても、多くの教員・職員、学生にとって激動の数年間であったのではないだろうか。しかし今では多くの学生が、問題無く大学での学びに励むことが出来ている。この場を借りて今一度、平穏な学びの場を設けて下さった全ての方々に感謝を申し上げたい。

私は現在、経済学部の三年生。四月には四年生だ。卒業まであと僅かとなったが、残りの大学生としての時間を悔いの無いものにしていきたい。経済学部も連れて行って欲しかったという密やかな本音は、この際胸の内に留めておくことにする。

佐藤拓也経済学部長が再任されました

一〇月の経済学部長選挙において、佐藤拓也先生が再任されました。会報八二号（二〇二二年九月）に学部長挨拶を掲載しておりますが、今回は経済学部 HP※の「経済学部長挨拶」から末尾の一節を引用させていただきます。

「経済学部のキャッチフレーズは、「本物と出会い、本物になる。未来を創る中央の経済」です。経済学部の持つ底力を若い学生たちに確実に伝えたい、社会のいかなる場所にあっても人々に信頼され、力強く活動できる「未来を創る若者たち」を育てたい、これが私たちの共有する想い・願いです。みなさん一人ひとりが、社会のあらゆる場面で活躍できる知識の広さと深さ、そして批判的精神を併せもった市民として成長されることを、心より期待しています。」

白門経友会としましても、「未来を創る若者たち」を育てたい、という学部長の想いにわずかなりとも手を貸すことができればと願っております。OB／OGの皆様のご協力をお願いいたします。

※経済学部 HP　https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/professor/

『やっぱり経済学はおもしろい！（中央大学経済学部編）』が刊行されました

二〇一七年出版の『高校生からの経済入門』（中央大学経済学部編）に続いて、昨年七月にその第二弾が刊行されました。今回は、中央大学の高校・大学教員総勢三二名が、「高校の勉強ってどう役立つの？」という疑問に対して、「高校までのすべての勉強が役立ちます！」と、確信をもって答えています。

会報の記事の募集

白門経友会では、会員の皆様の会報への投稿を募集いたします。経済学部のOB／OGのご活躍のご紹介や、学生時代の思い出を語っていただくのも歓迎いたします。うまく都合がつくようでしたら、インタビュー形式も考えられます。

中央大学経済学部は二〇二五年で創設一二〇年となります（さらに二〇二八年には多摩移転から五〇年）。往時の様子を語っていただくのは、オーラル・ヒストリー（口述歴史）の貴重な資料ともなることでしょう。投稿をお考えの会員の方は、白門経友会HPの「お問い合わせ」ページからご連絡ください。よろしくお願いいたします。

経済学部創立百周年記念奨学金へ募金のお願い（目標金額 六〇〇〇万円）

学生のキャリア形成を金銭面から後押しする「経済学部創立百周年記念奨学金」の原資が、遠からず尽きようとしています。

経済学部創立百周年に寄せられた多数の篤志から創設され、以来二百名を超える学生たちを後押し、各々が大きな成果を挙げるに至った本奨学金を、これからの学生たちにも等しく継続したく、現奨学金への追加という形で皆様のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

募金方法や税制上の優遇措置など、詳しくは公式 WEB サイトにございます。経済学部ページ下部の赤いバナーをクリック、スマホは QR コードからご覧ください。

公式サイトのバナー◀

え、あの先生が　シリーズ㉟

経済学部教授　中村　彰宏

二〇二〇年四月に経済学部に赴任した中村彰宏（なかむらあきひろ）と申します。名古屋出身の私は学部・大学院を通じて慶應義塾大学で学び、修士課程を終えた後、郵政省（現総務省）に入省しました。入省後も、指導教授他、多くの方々のサポートもあり継続して同大学院の博士課程に在籍し、規制・競争政策を学びました。その間、イェール大学統計学部への海外留学も経験いたしました。総務省を退職した後は、帝塚山大学、横浜市立大学を経て中央大学に赴任いたしました。

私が中央大学に赴任した二〇二〇年四月といえば、まさにコロナ禍が始まった直後でした。多くの先生方や事務の方々の努力により、中央大学の教育活動はオンラインも含め継続されていました。私自身も同僚となる先生方に対面でお会いする機会が少なく戸惑いもありましたが、少しずつ慣れていきました。

私は、情報通信市場と交通市場を主な研究対象としていますが、コロナ禍でこの二つの市場は大きな影響を受けました。国際間の移動はほとんどなくなり県間の移動さえも制限されました。他方、通信市場では、オンライン講義やリモートワーク、様々なオンラインエンターテイメントなど新しい通信サービス需要が発生しました。このようにコロナ禍では人々の行動は大きく変化していたので、コロナ前のデータでは、コロナ禍の状況を記述するのは困難で、私自身はエビデンスベースの議論をすることの難しさも感じましたが、コロナ化を契機に、通信と交通の関係は新しいフェーズを迎え、研究対象としてますます面白い市場になっています。

教育面では、公共経済学の講義、経済学部ゼミやＦＬＰ（全学連系教育プログラム）のゼミ、大学院の論文指導などを担当しております。ゼミでは、情報通信や交通、環境分野を中心としながらも、学生たちが主体的に決めたテーマで学習しています。中央大学の学生は、皆さん、元気で積極的で、私自身も楽しく勉強させていただいております。

実は、二〇年ほど前に、所属学会の大会が中央大学で開催され、多摩キャンパスを訪れました。その時に広大なキャンパスと真っ白な校舎がとてもきれいで、いつか、このキャンパスで働きたいなと漠然と思ったことを覚えています。

この度、念願かなって、歴史と伝統ある中央大学経済学部で教育・研究をする機会をいただきました。微力ではございますが、他の先生や事務の方々からのご指導をいただきながら、中央大学の発展に寄与できるよう努力してまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

二〇二四年度の総会について

前号でご報告いたしましたように二〇二三年度は、久しぶりに対面にて総会を開くことができました。二〇二四年度も同様に、対面にて開催します。

例年に倣い、六月の第二土曜日（二〇二四年は六月八日）に経済学部棟で開催する予定です。詳細が決まりましたら白門経友会ＨＰにてご案内させていただきます。ぜひご参加ください。

編集後記

会報の刊行が遅くなり失礼いたしました。こういうことがないよう、今後気を引き締めて皆様の期待に応えられるよう頑張っていきます。

今回は最近の多摩キャンパスの様子を学生目線でお伝えしようと企画してみましたが、いかがだったでしょうか。

さて、今年度末をもって、経済学部で長く教鞭を執ってこられた三名の方々が退職されます。この場を借りて先生方のこれまでのご貢献に感謝いたしますとともに、今後のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

井村 進哉 教授（金融論）
芳賀 寛 教授（応用統計）
八幡 一秀 教授（中小企業論）
※アイウエオ順

（幹事長　濱岡　剛）

2024 年 1 月 16 日　第 85 号
発行　白門経友会常任幹事会
編集　白門経友会編集委員会
〒 192-0393
東京都八王子市東中野 742-1
中央大学経済学部内
URL : www.wg-keiyukai.com
Fax : 042-673-3425